



社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会



ホーム
ページ
QRコード



ツイッター
QRコード

2024/4/1 No.95

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会
本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

望みの門の原点



理事長 木下 宣世

新年度の歩みが始まりました。過ぐる年度の御支援に心から感謝するとともに、本年度も望みの門の働きをおぼえ、変わることはないお支えを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

長い間猛威をふるい、私共の生活に様々な支障をきたしていた新型コロナウイルスが下火となり、昨年度は少しずつ行事等も再開されてきました。それに伴い、利用者の皆さんの明るさが増してきたように思います。本年度は諸施設の活動がさらに活発になるよう期待しております。

さて、昨年法人として取組んだことの一つに「中長期計画」の策定があります。このために事務局長、部長、各施設長及び管理者の皆さんが労してくれました。これからの5年、10年先を見通し、それぞれの施設・事業所がどのような運営をしていくのかを定めたものです。

そしてこの計画書の冒頭に私は理事長としての一文を載せてもらいました。なぜならば様々な具体的な計画がたてられますが、それ

らすべてが拠って立つ土台について記した文章が必要だと思ったからです。

それは創立の精神のことであります。どのような計画であってもこの精神を具体的な形で生かすものでなければなりません。

またこの精神については計画案を作った人たちだけでなく全職員の皆さんにも読んで頂き、心に留めて欲しいと願っています。

さらには望みの門のために祈り支えて下さっている多くの人々にも改めて望みの門の働きの意味を読み取って頂ければ幸いです。

そういうわけで以下にその文章を掲載させて頂きました。よろしくお願い致します。

～中長期計画の策定にあたって～

今から70年前、同じ敗戦国の西ドイツから2人の女性宣教師が、日本に派遣されてきました。ウルスラ・フォン・ライスウィッツ宣教師とドーラ・ムンディンガー宣教師です。彼女たちは不幸な境遇に陥っていた女性たちに伝道し、救いの手を差し伸べるためにM・B・Kミッションより送り出されてきたのです。彼女たちの働きと、その志に共感した人々の協力により生まれたのが東京望みの門と富津の望みの門学園です。

この度、当法人の中長期計画を立てることとなりましたが大切なことは創立60年を経た

今も、創設者たちの志を忘れることなく受け継いでいくことです。もしも私たちが彼らの抱いた創立の精神をないがしろにするなら、望みの門の働きは塩味を失った塩のようなものになってしまうでしょう。

宣教師の方々はキリストの招きを受けて日本に来られました。キリストの愛が彼女たちを衝き動かして日本へと心を向けさせたのです。

キリストは重い病に苦しむ人、悪霊にとりつかれた人、体の不自由な人、貧しい人、差別され、軽蔑され、悪人呼ばわりされている人々に近づき、受け入れ、彼らをいやし、救われたのです。それはキリストの愛の業であり、彼らに仕える業でありました。そして、その究極の業が十字架の死であったのです。彼女たちは、自分自身もこのキリストの愛によって生かされた者として、キリストに倣い、その愛を実践するために望みの門を創立したのです。

このことを全ての職員が深く心にとめ、キリストの教えである愛をもって仕えるあり方を目指して励んで頂きたい。

それがすべての計画の土台であり、また完成でもあります。



東京望みの門 自立援助ホーム マナの家 願いがかなった時の思い出

元職員 小中 乃美子

私が永福町教会に転会してきました時、礼拝と婦人会にルツ・ヘットカン普宣教師が出席されていて、東京望みの門の後援会へと招かれました。翌日出席したら、家が近いからと後援会の会計担当にされました。その日は総会の日で、寮生の報告も多くあり、職員の対応も繊細、かつ言うべきことは伝えておられるのがわかりました。ホセア書の望みの門の一句が心にしみました。私は会計担当になって最初に、何が問題なのかを問いました。宣教師を日本に送り、娘たちを自立させて送り出す運営の大半は、同じ敗戦国ドイツのMBKミッションからの献金により長い間、支えられていましたが、そこからの自立が望まれていたのです。

そこで小施設への公的援助獲得のための請願書を作り、H師、寮長、後援会長と、なりたての後援会会計担当の私で、都庁の担当者に支援金のお願ひに行き説明もしました。対応した方が言われました。「確かに小施設はそれぞれの支援でやっています。お金は都議会で予算審議にかけ、決議されないと出せません」と。そこで私達は「ぜひ私達の所に見



学に来てください」とお願いし来ていただきました。見て回られながら、小施設の運営についても考慮されているようでした。都議会で審議され、承認が必要なら、各党の幹事長にもお願いしようと私達は出向きました。その結果1981年に、東京都から支援金が支給されました。

小施設も必要ですが、もっと多くの方のためにH師は「いのちの電話」を発案し、ボランティアを育て、日本での働きを22年間で終え、次の方に託されました。その後2人の宣教師が来日され、日本語の学びをされました。私が宿直の夜10時にグロース師が事務室に来られ、ピリピ書の学びをしたり、G師はメッセージを作られ、この日本語でいいかと聞かれたり、お二人の努力に感謝しています。

勿論、MBKミッションまで出向き、その神学生や柱となった方々に長い間の支えの感謝をしたのは一番若い私でした。同行者は27人で30日かけての教会史の学びの旅でしたのに、望みの門の職員は私だけだったせい

しょうか…。

昨秋G師が来日され、現在の望みの門マナ
の家の働きを高く評価して帰国されました。

女性自立支援施設 望みの門学園

「クララが立った!」

園長 田尻 隆

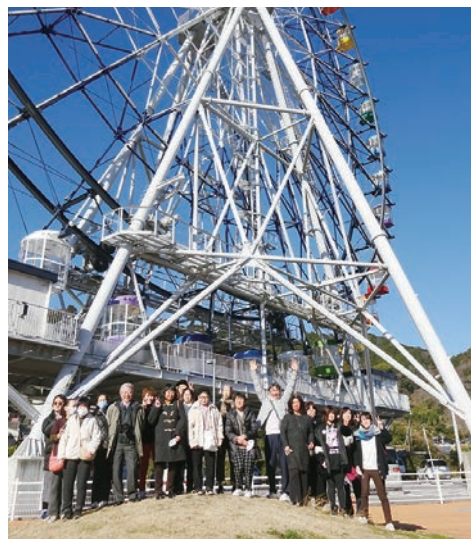
その昔、私が小学生のころ先生から「給食は三角食べにしないさい!」ときつく教わりました。おかず↓ごはん↓汁物↓牛乳を一口ずつ食べるのが三角食べです。これは「給食を残さず食べさせたい」という教育現場での指導だと言われています。だからと言って口の中にみそ汁の味が残っているところに流し込む牛乳は最悪です。おかげで今も牛乳は苦手なままです。近年、三角食べは「行き過ぎた管理教育の遺産」などと批判され、その言葉さえ聞くことがなくなりました。確かに懐石やフレンチは一品ずつ供されるので三角食べは無意味です。食事を豊かなものにしようとするれば、何をどう食べるかは本人が決めることで、他者がどうするかを押し付けるものはなさそうです。

この事に関係なく、学園の利用者さんは総じて偏食気味であります。野菜や魚が苦手な方にいかに美味しく召し上がって頂くか、栄

養士は日々努力しています。ある日、ピーマンの苦手な方がピーマンの肉詰めを美味しいと残さず召し上がりました。まさに「クララが立った!」的な驚きと喜びが沸き上がった瞬間でした。

この4月より「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」(以下、女性支援新法)が施行されます。この法律は困難な問題を抱える女性の自立に向けて、必要な支援を提供する体制を整備し、関係機関及び民間支援団体と共同しながら、**支援対象者それぞれの意思を尊重し**、抱えている問題及びその背景、心身の状況に等に応じた支援を行うことにより、女性の福祉の増進を目指すことを基本理念としています。まさに「三角食べ」というパターンリズム(強い立場にある者が、弱い立場にある者の利益の為だとして、本人の意思を問わずに介入・干渉すること)からの解放なのです。

今年の学園の年間標語は「キリストは新しい契約の仲介者なのです」(ヘブライ人への手紙9・15)です。聖書の言う契約は始め律法でした。「ああしなさい、こうしなさい、あれをしてはいけない、これをしてはいけない」という神さまの教えを守ることが強く求められます。しかしこれでは律法は、人間を豊かにするものではなく、人間に自らの罪深さや力の足りなさを痛感させるだけのものに



なっていました。そんな私たちに神さまは、新しい契約を与えて下さいました。それがイエスさまの十字架です。私たちが何かをするという事によってではなく、何も出来ない事を知ることによって神さまの愛、恵みを頂き、神さまに近づける道を開いて下さったのです。

私たちの罪を許し、神さまとの和解のために十字架にかかって下さったイエスさまの恵みを心から感謝したいと思います。そして女性支援新法の基本理念の下、学園で利用者・職員が共に「クララが立った!」的な驚きと喜びを織りなしていく歩みを目指していきたいと思えます。(にしても若い利用者・職員に「クララが立った!」が通じるのか、甚だ疑問ではありますが……)

養護老人ホーム 望みの門 楽生園

以前と現在の私

支援員 福本 剛大

以前に機関誌へ寄稿してから5年が経ちました。

5年間の間で自分に起こった変化や環境による変化・様々な事がありました。

2019年の台風、2020年からの新型コロナウイルス感染症等により新たな知識・対応・環境の変化で覚える事も多く無知である利用者の方への影響が多大である。そのことから自分自身の対応一つで感染症の拡大、災害に対して日頃の準備、意識訓練の積み重ねが利用者の方の命を守ることへ繋がることの重要性に緊張感をもって業務に励む機会となりました。以前に機関誌にて掲載の際にコミュニケーションについて伝えさせていただきました。

一般に「コミュニケーション」というのは、情報の伝達だけが始まれば十分に成立したとは見なされておらず人間と人間の間で《意思の疎通》が行われたり《心や気持ちの通い合い》が行われたり《互いに理解し合う》ことが起きて初めてコミュニケーションが成立したと言えると思います。楽生園の利用者の方の中には、聴覚・視覚・言語能力の低

下、認知症等の症状や障害によりコミュニケーションが難しいこと

により孤独感を感じてしま

うこともあり

ます。また、

ストレスにより精神的な負担が生じてしま

うこともあります。



以前の私は日常的な会話は成立していたが、互いに意思疎通や気持ちの通い合いが来ずに良いコミュニケーションが取れず、意思疎通困難であり汲み取る支援になりがちです。ただただ会話をしている事がありました。

現在の自分は相手の日常や状態に合わせ、雰囲気作りをして表情を確認しながら伝えたい事への理解をする為に日々の情報も把握し

てからコミュニケーションを図るようにしています。以前では理解できなかった事や伝えきれなかった事が、今では理解が出来る様

になり伝えたいことを相手の立場状況を踏まえて伝えられるようになってきたと感じています。

職員の一方向的な伝え方ではなく、その方に

あったコミュニケーションを模索しながら相手のことを知る・考えることでより良いコミュニケーションが図れ、施設生活の中でより安心した生活が送れるように支援員として今後も耳を傾ける姿勢を大切にしていきたいと思っています。

特別養護老人ホーム 望みの門 紫苑荘

一年が経過して

看護員 行貝 美絵

私は望みの門、紫苑荘にお世話になり始めてから、一年が経過しました。以前は19年間、有料老人ホームに勤務していました。

通勤時間に、30分程度費やしていました。何て遠いのだろうと、日々思っていたので

すが、気付けば19年の月日が流れていました。そろそろ潮時かと思い、一大決心しました。

その矢先に、紫苑荘で働いて見ては？と声を掛けて頂いた事を思い出しました。

ただ、義母が長期入所しているので、かなり抵抗があり悩む事もありましたが、背に腹

は代えられぬ思いで、入職する事にしました。現在、通勤時間2分とカップ麺が出来上がる

前に出勤出来ている様な状況です。

やはり、職場が近いと言うのは精神的、体力的にもかなり優しく思います。

4月3日、入職当所から、利用者様の熱発風邪症状が続き、タイミングが悪い時期に来てしまったと思いました。何をしたらいいか、利用者様の名前を覚えられるかと不安になりましたが、医務の皆さんの優しい教えとアドバイスがあり、現在に至っている次第です。まだまだ、覚えていない事も沢山あると思いますが徐々に出来る様頑張って戦力になれるようにと思います。

私自身生まれも育ちも結婚してからも富津で、職場も富津になり友達からはどれだけ富津が好きなのと言われた事がある程です。

一生涯、富津から離れられないのだろう。

友達の言う通り、富津の程よい田舎が好きなのかも知れません。

これからも施設入所者の方は勿論の事、地域住民の方々にもお役に立てればと思っています。持ち前の明るさで、皆さんを笑顔にそして楽しく生活して頂けるよう努めて行こうと思います。



特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里 相談職として

副施設長 飯田 篤史



今の時代、人のために何か力になりたいと思っても、安易に、困っている内容の背景を聴くのはプライバシーに関わるし、相手が聴いて欲しいと考えて相談してくれても、聴き方や言葉に配慮しないと、知らぬ間に相手を傷つけたりトラブルが起こりかねない。

『多様性の時代』という、性別・人種・障がい・近年では広く認識されるようになったセクシャルマイノリティなどの、表層的属性(目に見えてわかりやすいもの)を想像しがちですが、実際には、働き方・宗教・生活環境・考え方・経験などの深層的属性(目に見えない内面的なもの)があり、これらを含めると、指紋と同様に、人には無数の属性があるといっていると思います。日本は民主主義ですが、主流である多数派に属してるからといって、少数派を見下したり『当たり前のことだ』という言葉投げかけることは差別と捉えられるでしょう。

昨今、人と人との繋がり希薄化を感じる方も多いと思いますが、コロナで外出が減った後に交流が戻っていないのもあるかもしれません、他者との距離感が難しくなっ

いうことも一

つと考えま

す。人と関わ

る上で、準備

として心がけ

ていることが

あります。①

他者を尊重

し、他者と自

分の違いを尊

重する②目の

前にいる人に

は、自分には

見えていない部分がある③ただし、それをこ

ちらから知ろうとはしない④良いところを見

つけ、良くないと感じる場所にも寛容であ

ること。そういった自分のルールを日々の付

き合いや業務の中で模索していくことで、受

け入れやすく、柔軟な対応ができる生活相談

員でありたいと思っています。



老人サービス事業 望みの門サービスセンター 社会人一年目

介護員 本宮 誠哉



私が望みの門サービスセンターへ来てからもうすぐ一年が経とうとしています。

私は、高校を卒業して就職をするうえで、何か人の役に立てるような仕事をしたいと考えていました。その中で、高校在学時にいろいろな企業からの説明会の機会があり、高齢者介護を行っている企業の説明を受け、この仕事ならやりがいがあり、人の役にも立てると感じ、介護職に就きました。

4月から働き始めましたが、利用者の方とどう接したらいいのか、どう動いたらいいのかと何もわからずこの仕事を上手くやっていくかと不安でしたが先輩職員が丁寧に指導してくださり、不安が消えました。

デイサービスセンターでは、着脱介助、入浴介助など大変な仕事ばかりですが、先輩職員に教えてもらいながら、できるように努力しています。仕事を上手くこなしていくには、わからない

ことは聞き、教えてもらい理解することが大切な事だと社会に出て気づきました。少しずつですが、できることが増えてきたので、この仕事にとってもやりがいを感じます。



この一年何をするにも初めてで、戸惑うことも多かったですが終わってみればとても充実した一年でした。来年度以降は、今の自分よりもさらにレベルアップできるように介護についての知識を深め、できることを一つでも多く増やし更なるスキルアップを目指します。又、人としても成長できるように、常に向上心を持ち、感謝の気持ちを忘れずに業務に励みたいと思います。



介護支援専門員 濱崎 由実

11月16日より勤務させて頂いております。居宅のケアマネは初めてで勉強の毎日であったという間に4か月目になります。ケアマネの仕事は調整業務だと思います。現場の介護とは違って影の支援者だと思っています。表には出ないけど、利用者様の自立を助ける手段であるサービスを何処に使い何処に調節するかを考えること。利用者様とご家族が今の状態よりも良くなりたい。あるいは今の状態を維持したい。その思いをサービスを使う事で、「安心」出来る生活に戻す事だと思います。

入職してからのこの4か月間は日々の業務に追われてゆっくりと利用者様と向き合え

好きなお花
花言葉は思いやりと博愛



ていなかったのですが、各サービスの事業所の雰囲気やシステムが少しかつて、仕事の流れも少しずつではあります。が、わかってきたので、もう少しモニタリングの訪問時間を取りお話をゆっくり聞く時間をとる事、聞き出す力アセスメント力、聞き取る力をつけていきたいと思っています。ケアマネ業務では悩んでしまう事が多々あります。独居の方、ご家族との繋がりがうすく支援者がいない方、体調の問題、家族問題等様々です。考え方は人それぞれ違い、自分の普通が普通ではないと言う事が沢山あります。業務の事だけではなく、人との関わり方等沢山の問題があり悩みます。そんな時先輩のケアマネの皆さんはとてもあたたかく、困っているとさりげなく手を差し伸べてくれます。経験からのアドバイスをして下さる事が沢山あり、とてもありがたいです。

他にも包括の皆さんや富津市のケアマネ協議会や市役所の高齢者福祉課の方等相談機関があるので、一人で抱えられない時はお力を

借りながら、相談しながら頑張っていきたいと思っています。ケアマネは10年やって一人前と研修で聞いたことがあります。自分の経験値をあげて行けるように日々業務を行っていったらと思います。

居宅老人介護 望みの門ホームヘルプサービス 在宅生活を支えていく

管理者 久保田 地香

初めてヘルパーさんと出会ったのは、20数年前、家で寝たきりの祖父を介護した時でした。私、両親、祖母で祖父を支えていました。祖母以外の家族はフルタイムで働いていたので、私たちのいない時はヘルパーさんをお願いし、食事の介助、身体のケアをお願いしていました。たまたまヘルパーさんと居合わせた時、介護という仕事を知らなかった私にとってヘルパーさんの仕事ぶりに驚きました。さくさくと食事を準備し、祖父用にとりわけ『食べましょうね』と笑顔で声掛けしながら口元へ運び、間で手元は動かしながら祖母の話にも笑顔で付き合ってくれていました。まだ在宅診療が一般的ではなかったのが祖父は、最期は病院で迎えましたが、訪問介護、訪問入浴、ショートステイを利用しながら在宅生活を送っていました。在宅介護は

家族にとっては大変なことが多いのは事実です。そんな中、ほぼ毎日来てくれるヘルパーさんの存在はありがたかったですし、支えになっていました。

現在、在宅生活を望む方たちのサポートはケアマネージャーさんをはじめ、デイサービス、訪問看護、在宅診療、訪問入浴、ショートステイ、福祉用具などで、少しでも利用者さんとまたその家族が快適に自宅で生活を送れるように支援していく体制が、私が祖父を介護していた時よりも整っています。在宅で最後まで家族と一緒に過ごしたいという思いが、実現しやすいようになっています。

私たち訪問介護（ホームヘルプサービス）のヘルパーは利用者さんの在宅生活を最前線で利用者さんやご家族と向き合いかかわりあっていると思います。私が20数年前出会った『ヘルパーさんが来てくれて助かった』と思っていただけのヘルパーになれるよう、今日も笑顔で訪問していきます。

千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット 20歳の君津ふくしネットと共に

相談支援員 水野 市尾

房総半島一面が菜の花の黄色い絨毯で覆われる季節になりました。私が所属する君津ふ

くしネットは千葉県独自事業である中核地域生活支援センターを県から委託され、子どもから高齢者まで、障害があってもなくとも地域の生活者のだれでもが24時間365日相談できる総合相談窓口です。今年ではたちを迎えます。この20年の間で相談支援事業所も多く立ち上がり、それぞれの分野で相談できる窓口が増えました。そのため中核の役割として複合的な問題を抱えている方や、制度の狭間に落ちてしまう方への対応をより求められるようになっていっているのではないかと感じています。

昨年『伴走型支援』について学ぶ機会をいただきました。社会的孤立が深刻化する中、問題を解決するためではなくつながり続ける事を目的としたアプローチ方法です。生きづらさの背景が明らかでない場合や、8050問題など課題が複合化した場合ライフステージの変化に応じた柔軟な支援が必要な場合に特に有効とされています。この研修中自身の今までの道のりを振り返ってみると、私自身



もその時々色々な人に伴走してもらい『今』がある事を実感し改めて自分を伴走してくださった方に感謝の気持ちでいっぱいになりました。人として生きていく中で伴走されたり伴走する側になったりする事はとても自然の事だと実感しました。

君津圏域は広範囲にわたって山間部があり、まだまだつながりが必要としていてもつながれていない方が多くいると思われます。中核の強みである『アウトリーチ』、法人としての強み『乳児から高齢者までそれぞれの分野での施設運営』を最大限に活かしながら20歳の君津ふくしネットと一緒に『伴走型支援』の実践をしていきたいと思っています！

富津市富津地区地域包括支援センター マイライフノートご存じですか？

管理者 溝口麻理子

令和6年1月期のTVドラマ「春になったら」で、末期がんの主人公が医師から勧められて書き始めたのが人生ノート。今回はそちらの紹介をしたいと思います。

劇中では人生ノートと呼ばれていますが、一般的に聞くのはエンディングノートという名称でしょうか。富津市での呼び名はマイライフノートといい、他市町村では大切な人に

伝えるノート、絆ノート、わたしの手帖など様々な名称で呼ばれているようです。

当センターに寄せられた令和5年度の相談でマイライフノートに関する問合せはわずかに2件。終活という言葉は認知されてきていますがこのノートの普及や活用はまだまだといったところでしょうか。

終活とは、人生の終末を迎えるにあたり延命治療や介護、葬儀、相続などの希望をまとめ準備を整えることを意味しています。

マイライフノートはその道しるべになるものだと思います。過去、現在、将来などステージごとの項目について記述できるようにになっていますが、自分の事だけでなく出てこない、悩んだりするような項目もあります。じっくり自分自身と対話を繰り返しながら作成してゆくものなのかなと考えます。

また家族や信頼のおける人とのコミュニケーションツールにもなるものだと思います。



す。記入ができましたらノートに書いた何かしらの話をきっかけに、家族や信頼のおける人と話をしてみませんか。私らしさとはこうです、私はこのような事を考えています、私はこのような事を望んでいますと伝えてみてください。逆に家族から本人について詳しくきいてみる良いきっかけにもなると思います。かけがえのない大事な人がいつまでもその人らしく過ごせるように、お互いが思いを知って尊重できるようにしましょう。

マイライフノートは市役所、地域包括支援センター、社会福祉協議会、公民館、イオンモール富津などで配布しています。

一度お手にとってご覧いただき、活用してみませんか。

就労継続支援事業 望みの門新生舎 25年の変化



施設長 森 和浩

1999年4月1日に開所して今年で25年を迎える年となりました。設立から四半世紀。当初から利用している方も40歳を既に超え、利用者さんの大半の方は40代から50代と平均年齢も高くなってきたのを実感いたします。勿論職員もその中に入っていますが……。

この25年間を振り返ると当初は20名と少な

利用者の方々でしたので一泊旅行や家族とともに様々な行事も行われていたようです。自分自身の記憶の中では毎年夏に行われていたサマーキャンプ。秋



には家族会も参加する芝生の上の納涼祭。全員で大型バスに乗って行く社会学習旅行。そして正月には寿司店の大広間で開く家族会を含めた総勢75名の新年会。新型コロナウイルスによって様々な行事の在り方とはなりましたが、一昔前のような行事や催し物というのはもう難しくなってきたように思います。昨年度もどれだけ細分化して行事を催すか随分と工夫をして取り組んで来ました。感染予防という課題もあります。利用者さんそれぞれの体力や行動の差も大きく開き、ゆったりのんびり楽しむ班と体験や経験でワクワクする班といった二分した活動が多くなっています。

また、生活の場も主に家庭であったものが現在では16名、約三分の一の利用者さんがグループホームで生活しています。これは今後

更にその人数は多くなるのは必然と予想します。そしてここ数年は介護申請をしていく利用者さんも増加し、既に数人の方が障害福祉サービスから介護福祉サービスに移行し新たな生活がスタートしています。

25年という年月を重ね、望みの門新生舎を取り巻く様々なものの変化は施設や利用者さんの暮らしにも大きな変化があると感じます。今後の福祉サービス、特にB型事業所の運営についても法改正によって様々な変化をしていかなければ現在のようないくつかの維持できないというのが現状です。利用者さんの求めているニーズを的確に捉え、必要とするサービスに施設自体が変化していくことも視野に入れた新たな障害福祉サービスを構築して行けたらと改めて考えます。

特定指定相談支援事業所 望みの門/ホテル

正解は見えなくとも

相談支援専門員 藤本 未来

地域に暮らす障害児や障害者の方々の障害福祉サービスに繋げるための相談支援事業所として開設したのは平成25年(2013年)。開設当初は望みの門新生舎とグレースホームの利用者さんを中心に概ね45名程の登録者でしたが、開所して10年が経過し登録者の数は

95名となりました。当法人の利用者さんを中心とする相談業務から、地域で暮らすために更に様々なニーズに応える必要がある相談業務。学齢児の放課後デイサービスに向けた相談や、日常の生活に係わる相談、将来の生活や就労に向けた相談。

中には難病という切実な課題を持ちながら地域で暮らすための手段といった相談もあります。95人の登録者がいれば95通りの相談と解決に向けた答えを用意していかなければなりません。そのために富津市基幹相談支援センターを中心とした相談支援事業所同士のつながり合いや各障害福祉サービス事業所とのコミュニケーションと連携が求められます。中でも対応に苦慮しているケースに集中的に支援していく行動力や対応力は相談支援事業所の評価に直結します。対応したことが全て正解とはならないこともありますし、その答えというのは数年先に実態として現れることとなります。

相談して全て解決できるというものでもないですし、何が正解というのはいかなかなかありませんが今置かれている状態や状況を少しでも良いところを持って行くのが正解と考え、これからも取り組んで行ければと思います。そして、地域で暮らすことが「幸福」と思えるようなそんな支援を心がけていきたいと思っています。

共同生活援助事業 グレースホーム

『聞く』から『聴く』支援へ

施設長 白鳥 尋子

今年度のグレースホームは利用者19名でスタートです。

昨年同様イベント大好き職員達が様々な計画を立てているようです。また、今年は個々の希望を出るだけ尊重した企画や、ご家族様との交流の場も作りたいと考えております。

障がい者の共同生活援助（グループホーム）の指定基準には『支援者は利用者が自立した日常・社会生活を営む事ができるよう、利用者の意思決定の支援に配慮するよう努める。』と明記されております。グレースホームの利用者は自分の意思や意向を考え、伝える事がとても苦手な為、職員の提案通りに向いてしまふ。職員の言う事は正しいと自然に思い込んでいく傾向にあります。

個人的には「職員も人間、すべて正しいとは限らないよ!」と教えてあげたいくらいです。この傾向は利用者は勿論、職員にも決して良い事ではなく、支援というものを勘違いさせてしまいがちです。

誰しも自分の意向を伝えることはとても大切なこと。福祉に携わる私たちが援助・支援

すべきはそこからであり、昔の様に職員の都合や職員の思いに向けさせる支援の時代ではありません。

グレースホームでは、職員が結論を伝えるのではなく、自分はどう思うのか? どう考えるのか? 等、まず考え方のアド



バイスを加えながら問いかけ、自ら答えが出せるような支援に昨年は心掛けました。今年度も引き続き一人一人に親身に向き合い更に関りを深め利用者の心の声が『聴ける（読み取る）』環境づくりと、出来る限り個人の意向に沿った支援に努めてまいります。

個別対応を重視することは当たり前でありつつも利用者は障害特性が様々な故、職員の時間と労力を大きく使います。時間の制限がある中での支援は難しい場面も多々あり、また、一人作業での孤独さ・責任というプレッシャーのある仕事にも拘らず、『利用者という時間が楽しい』と言ってくださるグレース職員。支援の課題は抱え込まず、チームグレースとして全職員が課題を共有し、考え、学ぶ

ことによりモチベーションを高め、支援向上へと繋げていきます。利用者も職員も楽しく過ごせることが一番です。グレースホームの良いところは利用者も職員も仲が良いところ。今年も笑いが絶えない一年にしましょう!

児童養護施設 望みの門かずさの里

就いて一年の思い



保育士 吉澤 楓

かずさの里に勤めて、一年が経とうとしています。私はハンディキャップを持つ弟がきっかけで福祉を志し、県内養成校（専門学校）にて保育士資格を取得しました。

入職してからこの一年、あっという間に過ぎました。実家を離れ、全く知らない土地での新しい生活、また、社会人一年目として上手くやっていけるかどうか、毎日不安を抱きながらの生活を送ってきました。その中で、初めて知ること・学ぶこと、色々なことを吸収し、失敗を繰り返して、日々、反省し改善をしているところです。

春、まずは吸収することに必死でした。担当の幼児ユニットや里の生活を知ること、子どもの育ってきた背景（生い立ち）を把握・受け止めること。地域で生活する子どもたちのために各関係機関（幼稚園、児相等）との

つながりを理解すること。一番大切な実際に支援をする子どもたちとの関係作り。初めは、子どもと良好な関係を築くための心地良い声掛け等を考え過ぎ、視野が狭くなっていたような気がします。その結果、子ども一人ひとりの変化にも気付くことができず、上手くいかないことばかりでした。日々、試行錯誤し、時には先輩職員からアドバイスを頂き、実践する中で、上手くいったこともありました。ある日、なに気ない日常の中で、私の名前を呼んでくれた瞬間はとても嬉しく、子どもたちの中に、少しずつは存在感を残すことができていたのかなと実感しました。

夏。毎日暑く、長い夏休みが始まりました。自ずと子どもたちは里の中で過ごすことが多くなります。また夏休みは、子どもたちの楽しい思い出をつくり、様々な経験を通して成長できる時期です。それに向けて多くの行事が計画されました。ユニット外出や里全体での行事を通して、普段とは違う、子どもたちの新しい表情や様子を見ることができ、



嬉しく思いました。

秋・冬。担当ユニットでの子どもの入所・退所がありました。初めてのインテーク（子どもを迎え入れる準備）や退所（子どもを家庭や里親宅へ送り出す）の準備をし、子どもを中心に何をすべきか考えること、関係機関との連携・引継ぎの重要性を学ぶことができました。新しい環境での生活へと移っていく子どもたちの様子を目の当たりにし、その子どもの気持ちにどれだけ寄り添えるのか、第三者として子どもを育てていくことの難しさを改めて感じました。

年が明け、新しい年度（進学・進級）へ向けて、子どもたちと一緒に準備を始めています。春から幼稚園へ通う子ども、小学校へ入学する子ども。一年前の私のように、楽しみな反面、環境が変わることにたくさん不安な気持ちを抱えていると思います。その不安な気持ちに少しでも寄り添い、軽減できるようにと職員は子どもたちと一緒に準備をしています。

就いて一年、色々なことを経験し、躓くことや失敗することたくさんありました。一年では経験できないこと、知らないこともたくさんあると思います。失敗を恐れずに先輩職員のアドバイス（声を大きく！）、を受け止めながら、二年目、より良い支援へと繋げられるように前進あるのみでいきたいと思っています。

乳児院 望みの門方舟乳児園 方舟乳児園へ異動して

児童指導員 宇田川 愛

昨年の4月に、この方舟乳児院に異動し、早いもので1年が経とうとしています。当初、乳幼児との関わりに関して経験もなく、保育や周辺領域の知識もほとんどないなかで、手探り状態でした。最初は、初めて行うオムツ替えに四苦八苦。不慣れさからもたつき、動き回る子どもの動きに合わせるのもひと苦労。抱っこも初めてで、こわごと抱っこしている、先輩方からご指導をいただきました。業務にも少しずつ慣れ、手際よくするために考えながら行っています。

以前所属していた木下記念学園では小中学生を支援していましたが、学童以降の子どもと乳幼児では、距離感やコミュニケーションのとり方一つをとっても違いは大きく感じら





れ、はじめは戸惑いもありました。関係性の築きかたなどは、私なりのやり方で地道にすすめていきました。

また、どの子も発達や成長がめざましく、先週、昨日はできていなかった動作ができるようになっていて、より上手になっているなど、日々驚かされるばかりです。

とはいえ、言葉でも動作でも、習得できるまでには時間がかかることを念頭に、根気よく伝えるようにしています。行こうとしている動作が目的と合っていたり、拙くても行いたい動きに近づいていたら「合っているよ。できそうだよ」と方向性を示す声かけで安心感を伝えます。もちろん、上手いかない時は援助し、お手本を見ながら「次は足と床をベタッとくっつけるよ」「ボールを見て、手をえいっと伸ばしてみよう」などコツやイメージを伝え、支援しています。出来たら「上手に出来たよ。頑張ったね」と声をかけて達成感を得やすく習得しやすくなるようにして

います。

初歩的であるため私自身も忘れがちなのですが、道しるべを置くような小さな声かけがいかに大切で効果を持つものであるか再確認しました。こまやかな目配りが欠かせず、緊張感もある中ですが、私自身も子ども達と共に学びながら成長し、保育の専門性も兼ね備えた指導員になれるよう、さらに精進していきたいです。

望みの門里親支援センター

新年度にあたり「一粒の麦とあかし」

センター長 井本 義樹

令和6年1月1日、能登半島地震により犠牲となられた方々にお悔やみ申し上げます。被災された方々、ならびにそのご家族様にお見舞い申し上げますとともに、一日も早い日常の復興、心の平安がおとずれることをお祈り申し上げます。

2月初旬に暖かい日が続き桜、菜の花が咲いたと思いきや、3月の上旬にも関わらず、花に雪が積もるような不思議な天気が続いています。おかげさまで、3度目の春を迎えることができました。

令和4年の速報値になりますが、全国232カ所の児童相談所が児童虐待相談とし

て対応した件数は219、170件、過去最多をまた更新することになりました。以前当紙面にて「虐待相談件数が伸びることは必ずしも悲観的な事ばかりではなく、現社会で『社会的養護が必要な子ども、家庭』への認知が進んだ結果だから、必ずしも件数の増加を悲観的な数字ではない」といった内容を書いたと記憶しています。

近年の相談経緯に関する数字をみると、この考えに少し疑問を感じざるを得ません。平成23年度と令和4年度を比較すると、相談経緯の『本人』と『その他』は横ばい、それ以外は項目も軒並み減少傾向にあり、増加しているのは18・6%から51・5%になった『警察等』だけとなっています。このことから現社会の構成員は「社会的養護が必要と考える家庭」に対しての相談窓口が『警察等』と認知し相談が増えた。と考えると、相談機関の役割はどうなっているのか？また、『本人』の数字が横ばいとなっていることは「子どもが生活しやすい、生きやすい環境を大人が作っている」のだろうか？「こどもの意見表明権」が明文化された現代において、まずは大人が変わっていく必要性があるのではないかと大いに感じています。

昨年度、千葉県里親会と千葉県里親会君津支部の2団体において、里親だけでなく地域の子育て家庭に向けたペアレントトレーニング

グとして、『SS式イライラしない子育て法（CPS）』の講座が月一回、半年間行われ、私も参加する機会を得ることができました。本プログラムは基本的には「社会的養護が必要な家庭」を対象にしていますが（名古屋市内においては相談家庭へのプログラムとして児相で採用されている）、一般の子育てにもとても有効なプログラムだと実感しました。受講者から「休んだところを勉強したい」「分からなかったところをもう一度勉強したい」等の要請があったと聞き、「よろしければ」と声をかけ、補講を当法人内施設で行うことができました。（その節は関係各所からのご協力ありがとうございました。）

おかげさまで、好評のうちに講座を修了することができました。今回は急な補講でしたが、2日間で延べ5名の参加者と、とても有意義な時間を過ごすことができました。「一粒の麦が地に落ちて死ねば、多くの実を結ぶ：ヨハネ12・24」これ



からも、多くの実を結ぶ機会を作っていきたいと考えています。

児童心理治療施設 望みの門木下記念学園 この一年を振り返って

児童指導員 山下 優

私が当施設に入職し一年の歳月が経ちました。当施設への入職を決めたきっかけは見学に来た際に施設長がおっしゃった「褒める施設を目指している」という言葉でした。木下記念学園の子どもたちは過酷な環境を生き抜いてきた子どもたち。そして、数多くの失敗を繰り返してきたことで自己肯定感が醸成されていない子どもたち。それ故に思い通りにいかずに暴力や暴言が出てしまう子。物にあたってしまう子。外に飛び出てしまう子。前職でも子どもに関わる仕事をしていた為、子どもと接する事に多少の自信はあったのですが、ものの見事に打ち砕かれました。この様な環境の中でどのように子どもたちに接していけばよいのか。褒めるところってどこだろう。と日々悩んでおりましたところ、ある日の職員会議で施設長より子どもの問題行動について常に氷山モデルで捉えるようにと教えて頂きました。

氷山の見えている部分（問題行動）に焦

点を当てるのではなく、その行動に至る根本は何なのか。その答えはケース資料や日常生活の中にある。それに気づくことが大事であり、対処療法的な支援ではなく根本に向かった支援が重要であると。褒める施設を目指すという言葉に惹かれ入職したのにも関わらず日々の問題に追われ、問題行動ばかりに目を捕らわれている自分自身に気付かされました。向けるべき視点が間違っていたなと痛感しました。向けるべき視点を変えてみると「褒める」といった支援も変わってきたように思えます。出来た事を褒めるだけでなく、日常の既に出てきている事を褒めてあげることが大事なのではないか。

例えば、正しい姿勢で椅子に座っていられる事、声かけをしなくても自分からお風呂に入れること…。そして、褒めるタイミング・投げかける言葉・それに加えるべき動作…一



概に褒めるといっても観察と技術が必要なのだと考えるようになりました。

この一年間、私を支えてくださった諸先輩方と子どもたちに感謝しながら、日々考えること行動すること。そして、叱るのではなく、褒めて子どもたちの行動を変えていくことを肝に銘じ二年目も職務を全うしていきたいと思っています。

児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家 大人も子ども元気になる場所

管理者 井本 千鶴

今年も春がやってきました。桜や菜の花が綺麗に咲いています。ピーターパンの家も11年目がスタートしました。地域の皆さまの温かいご支援の中で、新しい一年を迎えられることに心から感謝しています。この春、ピーターパンの家の看板も新しくなり、遠くからもよく目立つ、新たな目印になってくれそうです。

さて、わたしたちスタッフが日ごろから心にかけていることの一つに「悪者を作らない」というものがあります。

人はうまくいかないことがあったときに、つい悪者を探しがちです。そこに怒りや悲しみをぶつけて、一時的にスッキリする。とい

うこともあります。が、根本的な解決には繋がらないとわたしたちは考えています。それは、悪者探しを続けている限り、悪者はいなくならないからです。敵意を向けると相手からも敵意が返ってきます。誰か（何か）と敵対し続けることは、とてもエネルギーのいることです。疲弊し、心も身体も弱ってしまうことにもなりかねません。

ピーターパンの家では、今できていることに焦点を当てます。できていることが見つかる。と少しずつ元気が出てきます。元気になる人やものはなにか、一緒に探していきたいと思います。探し物は一人より大勢の方が見つけやすいものです。

なんだかうまくいかない、という時には、ぜひピーターパンの家に声をかけて下さい。一緒に『元気のもと』を探しましょう。



編集後記

昨日3月31日は教会で「イースター礼拝」が奉げられました。イースターはイエス・キリストの復活をお祝いする日です。復活という奇跡によってキリスト教が宣教されてきたことを想うとその大切さがわかります。

本日4月1日は企業・団体で「辞令交付式」が行われます。今年度ものぞみ会には新たな仲間が加えられました。のぞみ会の基本理念は「キリストの愛によって他者に仕える」です。新人の皆さんは、これからそれぞれの事業所において緊張の中、多くの事を学んでいけることでしょう。

そんな皆さんにタモリさんの名言を贈ります。「やる気のある者は去れ！頑張ると疲れる。友達なんかいないくていいんだよ。」いかかでしょうか？ おそらく皆さんの先輩・上司は教えてくれないことでしょう。どうか肩に力を入れすぎず、真摯に業務に取り組んでみて下さい。

私たちの小さな働きをはるかに超えるイエスさまの十字架の愛が私たちには注がれ、日々新たにされているのです。自分の力を過信することなく、キリストの愛に全てを委ねてみましょう。

皆さんのご活躍を心よりお祈りいたします。